

当日は、授業参観中に所長さんなどを案内していた。すると、所長さんは不意に「この先生は何年目だ」「前はどこの学校だ」「専門教科は何だ」などと私に聞いてくるのである。私は、何を聞かれてもいいように様々な資料をファイルに綴じて持っていた。しかし、それを見ないで答えていた。準備をしている間に覚えてしまっていたのである。

無事に冷蔵庫チェックもクリアし、何とか大過なく学校訪問は終了した。今でも、教頭2年目の必死だった自分を懐かしく思い出す。人生とはわからないもので、この所長さんとの出会いが、後の私の教員人生に影響を与えることになる。やはり、仕事はいつも「誠心誠意」と思うのである。

教頭生活も2年目となると少しは余裕が出てくる。学校を閉める時間も1年目よりも1時間は短縮できた。1時間早いと、ヨークベニマルに行き、お惣菜コーナーに行っても買うものをまだ選ぶ余地がある。1年目は選ぶどころではなく、いくら値段が下がったかに満足感を覚えるだけだった。

中学校の場合、夏場は部活動を18時30分ころまでやっているの、金曜日に福島へ帰るために学校を出ることができるのは、早くても19時過ぎだった。金曜日は、先生方が私を早く福島に帰すために、部活動が終了するとすぐに帰ってくれていたのである。これが、どれほどありがたかったことか。秋になると、終了時間が早くなるので、18時半頃には学校を出ることができた。

すると、私が目指す所は福島ではなく、猫駅長で有名な芦ノ牧温泉駅近くにある有名なラーメン店「牛乳や食堂」だったのである。夜は20時まで営業していた。夏でも間に合うときは、必ず行っていた。私が店に入るのは、いつも19時半過ぎである。いつの間にか、私は、毎週金曜日19時半過ぎにスーツを着て現れるお客さんになっていた。私は注文すると、必ず「課長島耕作」を読んで待つようになっていた。私はこの漫画がけっこう好きなのである。必ず前週に読んだ次から読むようにしていた。

2年目の夏休みだったと思うが、ついに店員さんから声をかけられた。店のシフト上、金曜日はいつも同じスタッフだった。接客はあの方、ラーメンをつくってくれるのはあの方と決まっていた。話していると、私を学校の先生とは思っていたそうである。身分を明かし、しばらく話をした。さすがの繁盛店も金曜日の閉店30分前は、それほどお客さんもないのである。

それからである。私が店に入り席に着くと、頼んでもいないのに一品出てくるようになったのは。注文も「いつものですか」という具合だった。私は、1年目こそいろいろなメニューを試したが、結局「チャーシューメン」に落ち着いたのである。ただし、たまに麺を「手打ち」にすることはあった。

結局、3年4ヶ月もの間、私はかの有名店「牛乳や食堂」の金曜日の常連さんを務めることになった。いよいよ常連をやめるといふとき、いつものように頼んでもいない一品とチャーシューメンを食べ終え、厨房まであいさつに行くと、女将さんまで来てくださった。ちょっと感動的な場面だったことを覚えている。

(次号に続く)